

研究報告 2 令和6年能登半島地震における富山藩主前田家墓所
(長岡御廟所) この1年について

鹿島 昌也 納屋内高史 仲あずみ

(埋蔵文化財センター主幹学芸員) (同学芸員) (同学芸員)

はじめに

『富山市の遺跡物語』No. 25 号で報告した、令和6年1月1日に発生した能登半島地震により被災した富山藩主前田家墓所（長岡御廟所）（以下、墓所と呼称）について、倒壊した藩主墓石や灯籠の一部が長岡御廟保存会（以下、保存会と呼称）によって復旧作業が行われた。市埋蔵文化財センターでは、復旧作業に先立ち、倒壊した石造物の記録作業を行い、石造物を建て直す際に、埋蔵文化財包蔵地の一部地面を掘削する作業が発生するため、保存会から提出された文化財保護法第93条届出を受けて工事立会を実施し、石造物の組み合わせや方向の確認、破損した灯籠の火袋の回収などについて助言などを行ってきた。また、工事立会などの際にみつきり、発掘速報展2024で展示した越中瀬戸焼についても紹介し、発災からの1年間を振り返る。

1 被災状況

墓所内に所在する石造物で、藩主墓・墓前灯籠・寄進灯籠の計530基のうち154基(29%)が全倒壊（基礎・基壇から上部がすべて倒壊）した（表1）。墓所内には、ほかに室子の墓や勝姫の供養塔、手水鉢など約80基の石造物があり、これらには被害はなかったが、明治以降の灯籠15基のうち5基が倒れた。

(1) 藩主墓

墓所は藩主墓が所在する区域（内区）と藩主墓域の手前の空間（外区）に分かれ、藩主墓の区域（内区）はさらに西群と北群に分かれて所在する。藩主墓は、初代から11代までが土の方形墳墓の頂上に位牌型の石製墓標（下から墓標台座・塔身・笠）を置く形態で、西群7基、北群4基に12代は方柱形の墓標のみ西群の北辺に所在する。西群の8代前田利謙墓の墓標1基（塔身と笠）が南東方向に倒れた。幸い塔身と笠に割れなどの破損はなかった。

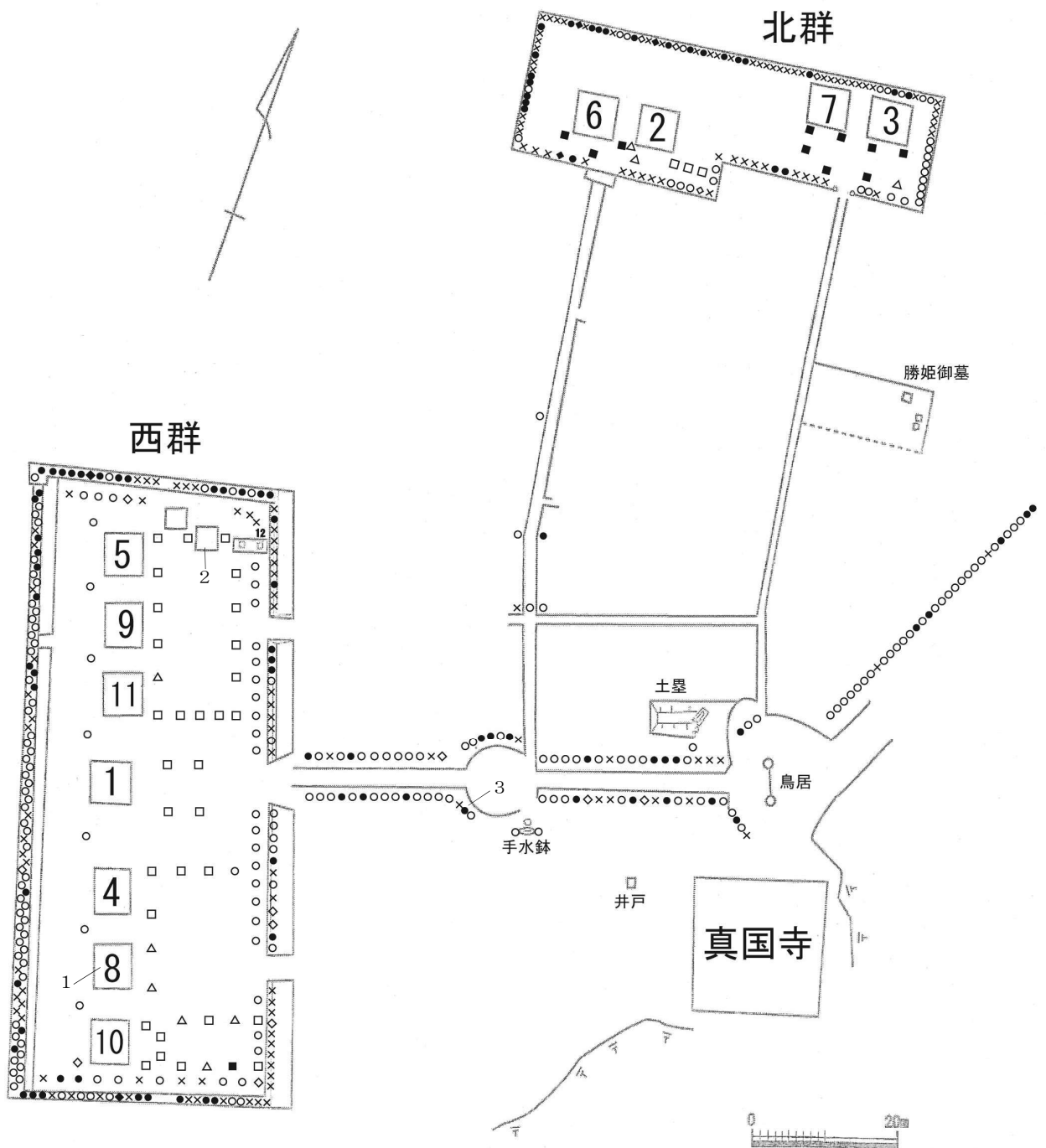
(2) 墓前灯籠

内区の各藩主の墓に向かう墓道の両側に複数基ずつ並べられた灯籠で、家臣の寄進灯籠より一回り大きい。

西群に38基、北群に16基の計54基ある内、西群の6基（8代墓前2基、10代墓前3基、11代墓前1基）、北群の3基（2代墓前2基、3代墓前1基）が全倒壊した。

種類	状況	西群	北群	参道	駐車場	合計
藩主墓	未倒壊	6	4	—	—	10
	全倒壊	1	0	—	—	1
	小計	7	4	—	—	11
墓前灯籠	未倒壊	32	13	—	—	45
	全倒壊	6	3	—	—	9
	小計	38	16	—	—	54
寄進灯籠	未倒壊	149	52	70	30	301
	全倒壊	66	62	14	2	144
	宝珠のみ落下	10	7	3	0	20
	小計	225	121	87	32	465
合計		270	144	87	32	530

表1 藩主墓及び墓前・寄進灯籠被害状況



凡例	
□	墓前灯籠 (倒壊なし)
■	墓前灯籠 (倒壊なし・補修済)
△	墓前灯籠 (全倒壊)
○	寄進灯籠 (倒壊なし)
●	寄進灯籠 (倒壊なし・補修済)
×	寄進灯籠 (全倒壊)
◇	寄進灯籠 (一部倒壊)
◆	寄進灯籠 (一部倒壊・補修済)

(古川知明ほか 2010「富山藩主前田家墓所長岡御廟所基礎調査報告」
『富山市考古資料館紀要』第29号富山市考古資料館の挿図に加筆)

(**数字**は藩主の代を表す。今回の地震で8代墓のみ倒壊した。1～3は図2の越中瀬戸焼出土・採集地点)

図1 富山藩主前田家墓所（長岡御廟所）における石造物（墓前・寄進灯籠）被災状況

(3) 寄進灯籠

各藩主に仕えた家臣が寄進した灯籠で、元は参道の両側に並んでいたが、昭和時代に移動され、内区や現参道（通路）に再設置された。「長岡御廟所御代々御墓並重臣ヨリ献灯姓名録」（富山県立図書館蔵前田文書 252）には総数 477 基の灯籠の位置と家臣名が記載されているが、現存する灯籠は 465 基（西群 225 基、北群 121 基、参道 87 基、駐車場 32 基）を数える。

地震により西群 76 基、北群 69 基、参道 17 基、駐車場 2 基の計 164 基が全倒壊あるいは一部倒壊（宝珠のみ等）し、うち 144 基が全倒壊した（寄進灯籠のうち約 31%）。転倒した寄進灯籠の部材のうち、火袋部分が割れたり欠けたりしたものも多くみられる。

2 経過

令和 6 年 1 月の地震発生から墓所における埋蔵文化財センターが関わった主な経過を表 2 にまとめた。発災直後は石造物の倒壊など被災状況の把握に努めたが、降雪期でもあり、倒壊石造物の総数把握には 1 か月程度の期間を要した。

2 月以降は、墓所の維持管理を行っている保存会の発注により、①未倒壊であるが余震などによる二次被害防止のため灯籠の部材接合部を補強するためのモルタル塗布等の作業が行われた。次に春の彼岸を前に、②参道や駐車場階段に設置されていて倒壊した灯籠 15 基の復旧作業が行われた。火袋が破損しているものは、火袋を除いて組まれた。引き続いて、③未倒壊であったが灯籠が傾いたものや大きくズレが生じたもの 28 基について、組まれている石材を一度取り外し、基礎の土台部分を安定させた上で再度組み直す作業が行われた。

月	日	内 容
1	1	能登半島地震発生（富山市は震度 5 強）
	2	墓所の現地確認、藩主墓 1 基、灯籠 150 基以上倒壊を確認、県教育委員会へ被害状況を一報
	9	富山新聞に「富山藩主墓倒壊」の記事（真国寺住職対応）
	18	石川県金沢城調査研究所富田和気夫所長が墓所の被災状況を確認
	29	長岡御廟保存会が二次被害防止のため未倒壊の灯籠 95 基の補強作業の実施を決定
	31	市埋文センター職員が灯籠補強作業前の記録写真撮影、倒壊・未倒壊石造物の総数把握
2	6	保存会発注で、未倒壊灯籠の補強（接合部にモルタル塗布等）作業着手
	22	県教育委員会へ墓所の被害状況の詳細を報告
	26	保存会から傾いた灯籠 28 基を対象とした復旧工事に係る文化財保護法 93 条届出が提出
	28	市埋文センター職員による倒壊灯籠の記録写真撮影着手 ～12 月まで
3	14	保存会発注で、富山市石材加工協同組合 3 社による参道・階段の倒壊灯籠復旧工事
	18	保存会発注で、未倒壊灯籠 28 基（傾いた灯籠など）の工事（～19 日）
4	17	墓所内民間墓地通路に落下した灯籠部材移動作業の立会
5	22	富山新聞に「8 代藩主の墓 8 月復旧」の記事掲載
6	14	保存会から 8 代藩主前田利謙墓復旧工事に係る文化財保護法 93 条届出が届く
	22	保存会発注で、富山市石材加工協同組合 5 社による 8 代墓復旧工事。
7	25	富山新聞に「藩主の墓、修復完了」の記事掲載
	30	発掘速報展 2024 で富山藩主前田家墓所からみつかった越中瀬戸焼など紹介（～R7. 1. 19）
8	5	東京大学埋蔵文化財調査室迫川吉生氏（江戸富山藩邸の発掘調査を担当）が墓所を視察
	17	富山新聞に「藩主墓の墓に 19 世紀前半の皿」記事掲載

表 2 富山藩主前田家墓所（長岡御廟所）における主な経過（令和 6 年）



①-1 灯籠補強作業（2月）



①-2 接合部モルタル補強



②-1 参道寄進灯籠復旧作業（3月）



②-2 灯籠基礎地盤安定作業



④-1 8代墓復旧作業（東から）（6月）



④-2 正面（東面）墳墓の土層堆積状況



④-3 墓標と基礎の間にステンレス棒挿入



④-4 8代利謙墓及び墓前灯籠復旧後



写真2 8代墓墳丘西面 越中瀬戸焼出土状況（4月）

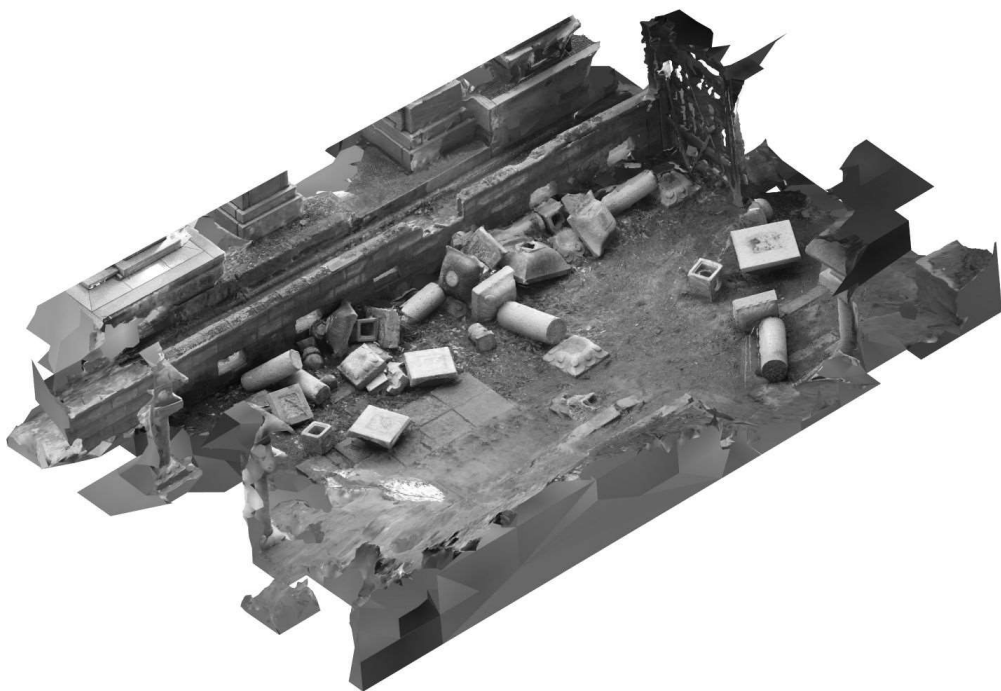


写真3 フォトグラメトリによる被災灯籠の記録画像（北群2代前田正甫墓南側）

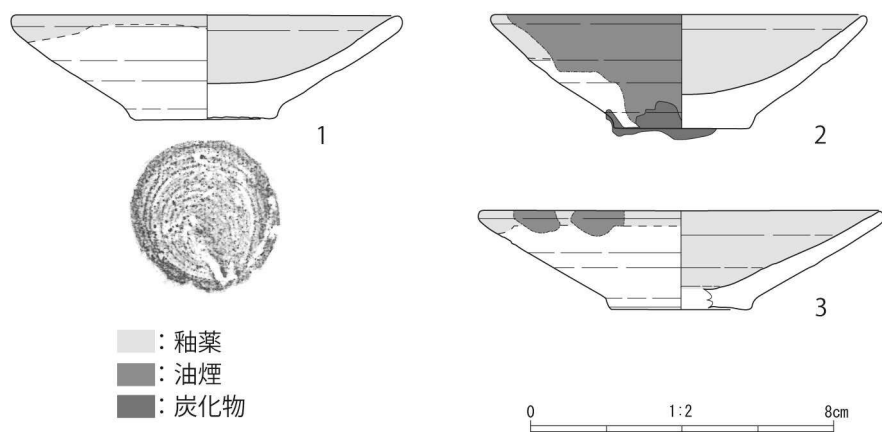


図2 越中瀬戸焼実測図

さらに、8月8日の初代前田利次命日に執り行われる「墓前祭」を前に、④倒壊した8代墓とその墓前灯籠2基の復旧作業が実施された。

①～④の作業にあたっては、いずれも埋蔵文化財センターの学芸員が立会い、灯籠の土台（基礎）下の土の部分の掘削する作業中に遺物が出土しないか、作業状況の写真記録や解体した石材を戻す際の組み方や竿の部分の天地に間違いがないかなど助言を行った。

3 出土・採集遺物について

石造物の補強や復旧作業に先立つ現地確認、作業立会中に江戸時代の越中瀬戸焼の丸皿（1～3）が3点みつかった。

1は4月に墓所内の現地確認に赴いた際に、藩主墓区画の西群に所在する8代前田利謙墓の西面墳丘中から半分ほど露出している状況を確認していた（写真2）。地震で倒壊した8代墓標の復旧作業が6月22日に長岡御廟保存会発注のもと、富山市石材加工協同組合の5社によって実施された。その事前打合せのために現地に向いた際にこの丸皿が地面に落下していたことから採集した。口径10.3cm、底径4.0cm、器高2.8cmを測る。底部内面に重ね焼きの痕跡、底部外面に回転糸切痕が残る。内面と外面口縁部から体部上部に鉄釉がかかる。

2は藩主墓区画西群の北辺に所在する宝篋印塔形をした大型の石塔である正室集合墓の正面の水鉢と左側の花入の間に供えられていた皿であるが、現地に足を運ぶと、地面に落下していることが度々あり、採集することとした。口径10.0cm、底径3.8cm、器高3.0cmを測る。正室集合墓は、明治38年の改装の際に新設されたと推測されており、1とほぼ同時期に製作されたとみられるこの丸皿は、江戸後期に築造された墳墓などから出土していたものが、集合墓に供えられたのだろう。炭化物が付着し、灯明皿などとして再利用されたようである。

3は3月の参道で倒壊した寄進灯籠復旧作業の際に、灯籠基礎部の脇で表採した。口径10.5cm、底径3.8cm、器高2.6cmを測る。

1、2については、令和6年7月から令和7年1月まで開催した発掘速報展2024にて展示した。

おわりに

能登半島地震で全倒壊した石造物154基のうち、長岡御廟保存会によって藩主墓1基、墓前灯籠2基、寄進灯籠19基の計22基が復旧されたが、未だに132基の灯籠が倒壊したままになっており、復旧の目途は立っていない。

一方で、これまで発掘調査が実施されていないことから、墓所の造営時期を特定できる遺物は見つかっていなかったが、石造物の復旧工事立会などで現地に向いた際に、江戸期の越中瀬戸の丸皿などを採集することができ、造営時期を特定する手掛かりが得られた。

とくに1の丸皿は、出土した墳丘の上に8代利謙の没年月日である享和元（1801）年8月26日が刻まれた墓標が建つことから、墳丘築造時に副葬されたと推測できる。19世紀初頭に製作されたことが特定できる貴重な資料となった。